



その道の達人のちょっといい話。

ロボットの達人

ロボットと暮らす



パロは2002年、「世界でもっともセラピー効果が高いロボット」としてギネスブックで認定された。現在のパロは第9世代。

ロボット開発者

柴田 崇徳 (しばた たかのり)

1967年、富山県生まれ。名古屋大学大学院博士課程電子機械工学専攻修了。マサチューセッツ工科大学人工知能研究所研究員などを経て、通商産業省工業技術院機械技術研究所ロボット工学部主任研究官。国立研究開発法人 産業技術総合研究所 人間情報研究部門 上級主任研究員としてメンタルコミットロボット「パロ」を開発。工学博士。

温かく柔らかい「癒し系」ロボット

『パロ』はこれまで約5,000体販売されています。海外では医療機器として承認されていますが、日本ではペット代わりに購入いただくケースが多いのが特徴です。ロボットなのに温かみや柔らかさがあって何となくそばに一緒にいる存在、がパロのイメージ。ペットのように名前を繰り返し呼ばれると反応し、撫でられると心地良く感じ、叩かれると嫌がる価値観を持っていて、飼い主の扱い方次第で好みの性格に変わります。

人ではなくロボットにできるケアがある

実証結果では、人間には心を開かなかった人もパロには心を開いた例が数多くあります。例えば徘徊を繰り返していた認知症の方がパロと触れ合うことで徘徊がおさまったり、いつも叫んでいる人がパロの足をなでて「お前も足が痛いのか…」とつぶやくのを聞いた介護職の方が足の手当をして穏やかになったり。ほかにも末期がんの患者の方の緩和ケアやアメリカでは戦争で心に傷を負った元兵士の心のケアにも使われています。

20XX年、宇宙飛行士をパロが癒す

今後の開発の方向はペット用、セラピー用、発達障害の子ども用など使う人に性格を最適化し、パロのセラピー効果を最大限引き出すこと。医療機器としての性能を高め、日本の医療現場にも定着させたい。もっと先の話では、今進んでいる火星探査計画で宇宙飛行士のストレス低減のためにパロを同行させるという夢があります。無重力環境や放射線の影響など課題はありますが、宇宙のパロを想像すると今からワクワクします。

そこまで来ている「ロボットと暮らす未来」

一般にまだロボットは日常生活では違和感がある存在かもしれません。携帯電話も80年代は持っている人が奇異な目で見られていましたが、今はむしろ持っていない人が珍しいくらい。お掃除ロボットも当初は掃除嫌いな人のためのものといった偏見がありましたが、今は「あってもおかしくない」ものになりました。パロや次世代のお手伝いロボット、ロボット機能を持った家があたり前になる日はそう遠くないと思います。